心理療法過程で生じる夢の中の他者，物，場所の役割

粉川　尚枝

1. 問題

Jung (1987/1992, p.20) は，心 (psyche) も生物学的現象と同様に，「合目的的性格」を持つとし，補償 (compensatory) の理論を提唱した。補償は，通常の心のバランスを保つための，「心の自己調整システム」として現れ (Jung, 1948/1974) ,「意識 (conscious) と無意識 (unconscious) の関係もやはり，補償的なもの」と定義される (Jung, 1934/1974) 。Jung (1952/1992, p.326) は，「意識と無意識の間の亀裂が広がるほど，人格の分裂が近づいてくる」，その結果，心理的問題が起こると考え,「治療がめざすのは，無意識の傾向を意識に統合することによって分裂を減少させ，うまくゆけば解消させること」と述べた。特に，意識的態度が一面的になり，個人の生命を脅かす方向に行きすぎると,一面的意識は補償され,その手段として夢が生じると考えた。

Jung (1948/1974) は，補償の目的を,「意識と無意識の統合」だけでなく,「人格 (personality) の拡大」とする。そして，夢は「おもに意識の状況を補償する，すなわちそこに欠けているものを補う」ものであり (Jung, 1952/1992, p.208) ，夢見手に無視されたり，認識されていない事柄を，心の自己調整のために自発的に表現すると考えた。分析心理学 (analytical psychology) では, 夢分析の目的は「これまで意識されていなかった諸内容を発見し意識化すること」であり，夢を「人格の育成にとっても効果的な補助手段」として重視する (Jung, 1934/1974) 。また，夢は「内的な真実と現実をあるがままに表現するもの」とされ，夢に隠された意味はなく，夢のイメージそのものが重要な意義を持つとして扱われる (Jung, 1934/1974) 。

無意識の内容が意識的な態度にとってかわるのでは，別の一側面に意識が偏ってしまうため意味がなく, 無意識的な側面に気づき, 以前の意識的態度に統合することで人格は拡大される。補償される無意識的側面には，その人の生きられていない側面 (shadow) ，その人の潜在的な女性的側面・男性的側面 (anima・animus) ，母性・父性などが内在されると考えられる。また，Jung (1948/1974) は，心の一部に，その人独自の個人的無意識の他に，集合的無意識 (collective unconscious) の存在を仮定した。集合的無意識とは,「個人的無意識よりも深層にあり，意識からより隔たっているもの」で (Jung, 1948/1974) ,「遺伝によって与えられ，だれでもが潜在的にもっているもの」とされる (Jung, 1952/1992, p.20) 。夢は潜在的な心の側面を表すため，集合的無意識からも，夢見手の属する文化・時代の人々に共有されたイメージが利用し得る。

これらは「夢の中の全ての像を，夢見手自身の人格の具現化した姿として理解する」主観水準の解釈 (interpretation on the subjective level) である (Jung, 1948/1974) 。主観水準で解釈する

場合, 夢の私 (dream-ego, 以下*私*と表記) は「潜在的自我の像」とみなし得る (河合, 1971, p.170) 。Jung (1968/1976, p.25, p.26) によると，自我 (ego) とは「絶対的に必要欠くべからざる意識の中心」で,「自分の身体，つまり自分の存在についての一般的な認識」と「長期間にわたる一連の記憶で自分が存在し続けているという確信を持つこと」である。そのため，潜在的な自我の像である*私*が一面的に偏った意識のあり方と異なるあり方を夢で体験することは，他者に表される無意識の側面の統合に繋がる。日本人のクライエント (以下 Cl と表記) の夢では，無意識的側面の統合の際，*私*に付き添う他者の存在と，*私*が他者の振舞いを見ることの重要性が示唆された (Konakawa, 2016) 。*私*と他者の関係には，付き添う他者のような種々のバリエーションが想定され，*私*が他者の行動を見て他者に表された心の側面を取り入れることから，夢の中の他者の振舞いに注目することの意義もうかがえる。また，西洋の象徴が「人間」から構成されるのに対し，日本の象徴は「自然」から成り立つこと (Kawai, 1995/2013, p.110) を考慮すると，日本人の夢を分析する際は人だけでなく, 物や場所にも注目することが必要となると思われる。

心理療法場面で Cl から夢が語られることは多く，セラピスト (以下 Th と表記) は夢を聞く際，幅広い視点に開けておくことが重要である。本論文では，夢の中の他者，物，場所の役割について考えることを目的とする。夢の中の他者，物，場所への着目と検討が，Cl の心理的テーマへの示唆を得ることや，後の心理療法の展開に繋がったと考察される，17 の夢分析の事例を集め，それらの夢への考察を整理することで，著者の考えを論じる。

2. 夢の中の他者の役割

(1) 夢の私に対する夢の中の他者の意味

① 脅威的な他者―夢の私と緊張関係，対立関係にある他者

まず, 夢で*私*と相対し主導権を争い合う, *私*が脅威を感じる他者について, 夢の例をあげる。

夢①「僕はこの部屋にいる。カウンセラーはあなたじゃなくて，僕より年上の，あまり親しくない学校の友人。気分が良くなくて，早く終わりたいと思っている。カウンセラーのほうもそう思っているような感じがする。セッションは 10 分ぐらい早くに終わる。カウンセラーは敵意を持って話している。いつもの友人の様子と違って結構激しいところがあるんだなあと，僕はそれを不思議に思う。僕が一生懸命話しても，カウンセラーは僕の言葉を受けとめてくれない。僕の言うことをすべて否定する。僕は沈黙して，ただ受け身で聞いているしかない。負けている感じ。…」 (Giegerich, 2013, pp.134-135)

この夢①の男性 Th について，Giegerich (2013, p.136) は,「彼よりも年上で，指導力があり，外向的で，人と関係を結べる男性 Th」を,「この Cl 自身の肯定的な影，生きられていない潜在能力」として検討し，この Th と*私*が向き合うことは非常に治療的だと指摘する。河合 (1982, p.30) は,「“わたし”という人間が一つの体系をもっていると，その逆になる側の人間を代表するものとして，よく性格の反対の人が夢に出る」ことを指摘するが，夢①のように，*私*にとって他者の振る舞いが敵対的で，攻撃的に体験されるのは，夢の中の他者が現在の自我にはない特徴を持ち，その側面から働きかけてくるためと考えられる。しかし，敵対する他者は，自我にはまだ異質性が強く，嫌な気持ち悪いイメージで現れてはいるが，Cl の潜在的な可能性でもあるため，それとの関わりは補償的である。例えば*私*が相手を倒したり，新たな共生関係が築かれることで，心の側面の統合が起こり，夢自我は成長する (Konakawa, 2016) 。前川 (1997)

の事例では，心理療法の後半に獰猛な犬を*私*が解放する夢が生じ，「それを自由にするだけの強さが Cl には育ってきていたのであろう」と考察されているが，自我に影の側面が統合されるにつれ，夢の中の他者の脅威も減り，*私*と他者の主導権のバランスは変化すると考えられる。

また，高嶋 (2014) の事例のように，Cl の一面的に偏った意識のあり方を体現する夢の中の他者が，無理をきたしている Cl の状況を反映して暴走し，*私*の脅威となる場合もある。どちらの場合も，敵対・批判する他者の行動が契機となり，*私*が情緒的に動かされることで，対象と*私*の関わりや影の側面への気づきが生じ，新たな展開が生まれているため，Hillman (1979/1998, p.155) が，「自我こそは，よみの国 (underworld) でどう振る舞えばよいのかを知らない者である」と述べるように，脅威となる他者は，この間違えている*私*を新しい可能性に開かせ，一面的な意識のあり方に気づかせる役割を持つと考えられる。また，まだ*私*との直接的な関わりが生じない場合も，「生きられていない」側面 (Giegerich, 2013, p.136) ，「意識されていない自身の在り方を表す」 (高嶋, 2014) などと考察される敵対する他者との対面は，*私*に恐怖を感じさせるだけで十分意味があり，Cl に心理的テーマをつきつけ，心理療法の契機となると思われる。

② 友好的な他者―夢の私に付き添う，夢の私を助ける他者

夢の中の他者として，*私*の成長過程に付き添う他者が，重要な役割を持って繰り返し現れることは，日本人の夢の特徴である可能性が示唆される (Konakawa, 2016) 。間違える*私*を導く他者は，敵対する他者と類似した役割を果たしているが，友好的他者の特徴は，*私*に親和性のある振舞いをとることである。夢見手の意識のあり方に欠けている同じ影の側面でも，自我に比較的親和性のある心の側面は，友好的な他者として最初から*私*を助け，夢自我の成長を促進するのではないかと考えられる。友好的な他者との関わりを表す夢の例を以下にあげる。

夢②「…突然，私だけが吊り上げられて海か湖に落とされる。私は落とされた勢いで深い底まで沈む。底にしゃがんだ形で足も手もつき，私は水面まで早く上がらないとという気持ちで思いっきり足で底を蹴る。上がる方向がずれたのか，はじめに落ちた場所よりも離れた所に顔を出す（なぜか，これは誰かに試されている修行のようなもので最初に落とされた場所に戻らなければいけないことを知る）。するとすっと私の手を下から救うように持ってくれる女の人が私の両脇に来る。女の人は白装束を着けている。私は体が楽になり，その女の人の導いてくれるままに身をまかす。その女の人二人は泳いで私を元の落ちた場所に連れて行ってくれる。私は元の場所に来れたのと，聖なる感じのする女の人二人に助けてもらった感動で胸が一杯になる。海面に顔を上げたとき，もうそこまで泳ぐ元気はとてもなかったので，とても不思議な体験をして助けられたこのことは，強く心にも体にも刻まれた。」 (川嵜, 2007, pp. 7-8)

夢②のように，友好的他者に直接的にも間接的にも助けられながら，*私*が敵対する他者との関わりで生き残り，経験を積んでいくことは，夢自我の成長に繋がり，またその過程で友好的他者の側面も*私*に統合されていくと考えられる。前川 (1997) は，こうした*私*を導く他者を Cl の「自分のなかの癒す機能」と考察している。Cl の持つ癒す心の側面と，自我の関係が深まることで，夢の導く人も変容し，Cl の心的過程の回復に繋がると考えられる。また，何か実際に私を助けるわけではないが，友好的他者が*私*と共にいることに意義がある場合もあり，注目すべきと思われる。例えば，河合 (1986, p.54) の事例では，Cl の夢に繰り返し現れる友人 M について，「影ともいえる M と共にいることで，クライエントがやや「がらの悪い」影の部分を統合するための行為をしたことが示されている」と考察されている。

一方で，責任を負おうとしないあり方が問題となっているClの場合，友好的他者が*私*を助けられない状況も重要で，これは夢自我に脅威を感じさせず，*私*に新たな振舞いを展開させる契機となる。同様に，友好的他者が*私*から別れていくことにも，重要性が示唆される。Umemura (2015) は，夢での友好的な他者との別れを，その他者の表す心理的なテーマを「ある程度 Clが達成した」ことの現れとして考察しているが，これまで共にいた友好的他者との別れが新しい他者との出会いの契機となり，心理療法過程での新しい心理的テーマへの移行に繋がる場合もある。また，橋本 (2013) の事例のように，友好的他者が代わりに出立し，*私*を一つの場に留まらせることで，夢自我にその場の体験を深めさせる，といった役割も考えられる。

③ 傷つく他者―夢の私の身代わりになる他者

夢では*私*だけでなく，夢の中の他者が傷つくことも多いが，夢見手の心に欠けた側面が傷ついた他者として現れる場合と，偏った無理のある自己像を表す他者が傷つく場合があると思われる。まず，夢③は，育まれてこなかった心の側面が，傷ついた他者として現れる夢である。

夢③「小学校の同級生だった女の子の父親が幽閉されているので，それを自分が救出に行く。それは城のようで，城が燃え落城しようとしていた。そして，その父親は焼死した。……（テレビのスイッチをかえた感じ）日本シリーズで巨人と阪急が戦うところ。」(河合, 1986, p.42)

河合 (1982, p.24) は焼死した女の子の父親を，夢見手が「発達させずにいる」父性像と考察しているが，他の事例でも傷つく他者は，「触れてこなかった感情面」 (瀬川, 2016) ，「Clが生きられなかった，影のような存在」 (桑原, 2016) などと考察される。川嵜 (2007, p.81) は，「実際，心理療法においては本質的には自分が自分を癒やす」と述べるが，*私*が救出や手当を通して傷ついた他者に表される心の側面と関わり，自我に欠けた面を育むことは治療的である。一方，こうした傷つく他者は，まだ痛みを引き受けられない夢自我の代わりに傷つきを体験しているとも考えられる。石川 (2014) や桑原 (2016) の事例では，夢自我は他者の生々しい傷を見たり，悲鳴を聞くことで，実感を伴ってある心の側面の傷つきを感じ，自身の身体切断の痛みさえ実感できなかった*私*が全身で泣くなどの変化が生じている。こうした他者の傷つきを通して直接的な実感を得ることは，*私*の変容に繋がるものと思われる。

次に，これまでの自我のあり方，自己像を担う他者が死を体験する夢の例をあげる。

夢④「私はタクシーに乗って，駅から職場までの道を進む。職場に着いたとき，同僚三人がやって来て，また駅に戻らなくてはならないと言う。運転手さんがまた車に乗ろうとしたときに，後ろから車が走ってきて，運転手さんをはね飛ばした。何が起こったのかを理解する間に，タクシーは運転手がいないのにゆっくり進みだした。少し進むと前方にばらばらになった運転手さんの死体が散乱していて，横を通り過ぎたときに，いつの間にか運転席に，死んだはずの運転手さんが何もなかったように座っていた。…」(Giegerich, 2013, pp.169-170)

Giegerich (2013, p.172) は，この*私*も「最初，運転手という活動的な自我の側面を持っていて」，この側面が運転手のイメージとして現れ，事故にあって殺されたことに意味があったと指摘する。そして，自己像を担う他者が死ぬことについて，「これまで見てきた自我の終わり」と「非自我的なスタイルへの変容が起こっている」と意味づけている (Giegerich, 2013, p.173)。他者の死を*私*が目撃するためには，まずは自我が一体化していた無理のある偏った心の側面からある程度分化することが必要になると思われるが，*私*でない他者が変容を体験することには大きな

意味があり，また，*私*がその死に直面することも重要と思われる。

(2) 夢の中の他者同士の関わりの意味

河合 (1976) は，「夢のなかの体験があまりにもその人の自我存在から遠くなるとき，その体験は行為することよりも，みることの方に重点がおかれるようになる」と指摘するが，*私*が他者と関わらず，他者同士の関わりを見ている夢は多い。夢⑤は，その例である。

夢⑤ 「私は従姉と車に乗って 1 階の狭いホールでエレベーターを待っている。従姉は運転席，私は助手席にいる。…会場の真ん中くらいに座っている中年の女性が立ち上がり，従姉に声をかける。従姉は色々な人に一緒に旅行に行かないかと声をかけていたらしい。その女性が従姉に，「一緒に行く気持ちはあるんだけど，どこに行くかを言ってくれないから断ったのよ」と言っているのが聞こえてくる。それに対して従姉は，「母が言うなと言うから言わなかったの」と答えている。私は，なぜ従姉の母が言うなと言うのか，なぜ行き先も教えずに知り合いを旅行に誘うのかが不思議だと思う。」 (Giegerich, 2013, pp.82-83)

Giegerich (2013, p.93, p.94) は，この夢の従姉と中年女性のやりとりに注目し，女性を，「意思を持って立ち上がり，従姉に声をかける「私」」「判断・決断する自我，すなわち，「私」」として，女性の特徴から今の Cl のあり方に欠けた側面を検討している。他者同士の関わりを，Cl の心の側面同士の関係が表されたものと考え，片方が自我に近い立場を，もう片方が影の側面や潜在的な可能性を含む側面を表すものと見た上で，自我に近い他者に着目し，補償的な他者との関わり方を検討することは，Cl の心理的問題を明らかにするために役立つと思われる。

川嵜 (2000, p.96) は「なにかとなにかとの間にある「―」という軸だけが夢の中には示される…「―」とはその両端にあるものを比較した上で出てくる差異という言い方もできる」と述べているが，この「―」の一端を担えるほど Cl の自我が育っていない場合や，自我と問題を抱えた心の側面の分化が曖昧な場合，*私*に相対する他者は現れにくいと考えられる。また，夢が自我を圧倒するほどの心理的テーマを含む場合や，自我自体が脆弱な場合，*私*自身が夢の中に存在しないこともある。しかし，夢の中で他者同士が関わる中で，自我に近い他者の不自然な様子や，可能性の側面を持つ他者が自我に近い他者に何を求めるのか，などを目撃することで，*私*は間接的に，意識に欠けたあり方への示唆を得ることになる。傍観者的な立場をとっていた*私*が主体的に成長し，夢の中の他者と相対し得るようになることも治療的だが，*私*が直接関与しない場合も，他者同士の関わりを見ることから補償が体験されるため，夢の中の他者が互いに関わりを持つことにも，また意義があると思われる。

(3) 夢の中で生じる他者の立場の変化

*私*に対する他者の立場について，脅威的他者，友好的他者，傷つく他者，他者同士で関わる他者，と大まかに分類して考察したが，同じ心の側面を表す夢の中の他者も，その立場は心理療法の過程で報告された一連の夢 (夢系列, series of dreams) の中で一貫しているわけではない。先述した河合 (1986, p.42) の事例の夢③では，父性像を担う他者は，傷ついた他者の立場にあったが，心理療法が進むにつれて，*私*を補助する他者の立場に変化した。以下がその夢である。

夢⑥「高校へ行っている夢を見た。一月に学校へいき，友だちと「久しぶりやな」と話しあっていた。そして，教員室へ呼ばれ，校長先生から「しっかりやれ」といわれた。…」 (河合, 1986, p.50)

夢⑥について，河合 (1986, pp.50-51) は「まだ実際に話をしたことのない高校の校長先生より激励されたことは，本人の父性像が少しずつ確立されてきたことを物語っている」と考察し

ているが，心理療法の経過の中で*私*と父性像の関わりが回復し始め，潜在的なClの男性性が育まれたことで，父性像を担う他者は*私*を助けるほどに立場が変化したと考えられる。橋本(2011) や石川 (2014) の事例のように，同じ心理的テーマを表す夢の中の他者が，心理療法が経過する中で*私*にとって危険性を孕まない他者に変化し，他者の持つ異質性が薄まったり，新たに登場した他者と*私*の関係を媒介し始めることは多い。このような変化には，他者の表す心の側面の自我への統合が進んだことや，Clの心理的テーマの展開が示唆される。

加えて，一つの夢の中でも他者の役割が変化する場合があり，これについても例をあげる。

夢⑦「一人の女性がいた。彼女の二人の姉は，ある強い男に強奪されたか，殺されたということである。そして，その男がこの女性も犯そうとしてやってきた（なにか昔話のなかの，人身御供のようであった）。私と誰か（兄らしい）は二人で彼女を守ろうとしていた。しかし，男が来たとき，我々はそいつが強すぎて戦っても無駄だと知った。そこで私は（男性だが），彼女の身代わりになろうと思った」「侵入して来た男は自分の兄だったかもしれない」(河合, 1982, p.29)

夢⑦について，河合 (1982, p.34) は「夢のなかでの兄の存在というのはいささかトリックスター的で，なにか攻め込むほうでもあるし，守るほうでもあるというおもしろいことをしながら，結局この人に女である経験をさせている」と述べる。このように夢の中の他者の立場は，一つの夢の中でも変化し，他者が*私*の敵・味方と流動的になることは夢の特徴と思われる。川嵜 (2007, p.273) は，夢の中の他者の変化について「ドアの向こうに何か恐ろしい顔をした妖怪がいて，ドアを開くことが夢見者には怖いのだが，思い切ってドアを開けて向こうに飛び込んでみると，怖いと思っていた妖怪が実は友人だった」という例を挙げるが，“ドアを開ける”ような，他者の立場が変化する契機となった出来事は重要であり，それが*私*の振舞いか他者の振舞いかに関わらず, なぜそれが変化の契機となったのか検討することは意義があると思われる。

3. 夢の中の物の役割

(1) 夢の中の物の意味―心理的な課題，自己像の反映

川嵜 (2007, p.271) は「夢は意識的にみようと思って見るものではなく，「見てしまう」もの」で,「夢見者の心理的な課題 (ひっかかり) を表象する」と述べるが, 前川 (1997) や東畑 (2014) の事例のように，心理的問題を抱えたClの現状や自己像が物の姿で現れることは多い。以下に例をあげ，夢イメージとしてその物が選ばれた意味を考えることの意義を検討する。

夢⑧「私はタンスの中の衣服を調べていた。すると，失ったと思っていたブローチが見つかった。“どうしてあんなに残念がっていたのだろう。失ったと思っていたのに，こんなところにあったのだわ”と思った。」(河合, 1982, p.8)

夢の中の物について，夢見手にとっての意味と，普遍的な意味を合わせて考えることは，夢見手の心理的な課題や自己像を知ることに繋がる。例えば河合 (1982, p.14) は，夢⑧で真珠のブローチがあったことについて,「失ったはずの日本女性としての誇りというものはあるのじゃないだろうかということ」と,「母性性というものを回復するということがあるのではなかろうか」と，両面からその意味を考察し，Clの「内界からの自我の再統合の可能性」を指摘する。

また，前川 (1997) は，アトピー性皮膚炎のClの夢について,「身体感覚を，夢の世界で“醜なるもの”として置き換え得た」との意義を述べているが，心理的課題が実体を持つ夢の中の

物として存在することで，夢自我が直接関わりを持ちやすくなるという意味も考えられる。*私*がイメージとして現れた物の状態を見て，それに直面することは心理的テーマの意識化に繋がり，*私*に心理的テーマと関わる意志が生まれることもある。また，橋本 (2011) の事例では，裸でいて服を着なければと焦る反復夢について，「表面に見えているものと，いかに自分がそこから隠され，外に曝されることのない内的スペースを持てるのかというのは，この反復夢と照らし合わせても，Cl の大きなテーマであった」と考察されている。夢イメージには夢見手の心理的課題が表されると考えると，このように夢系列に繰り返し現れる物が，Cl にとって主要なテーマを表す場合は多いと思われる。Umemura (2015) の事例では，Cl の夢に植物が多く現れており，この植物の状態の変化に着目しながら，植物に表される Cl の女性性の成長を考察している。夢見手の自己像と思われる物，夢に繰り返し現れる物が，心理療法過程でどのような状態をとるか注目することも，その時々の Cl のテーマや状態を知る手がかりとなると思われる。

(2) 夢の中の物と夢の私の関わりの意味

夢の中の物には，心理的な課題を表象するイメージが選ばれるため，その物との関わりを通して*私*が体験的に気付きを得ること，特に物との関わりで生じた*私*の実感，感覚的体験が重要である。例えば，河合 (1982, p.13) は夢⑧について，「自分の内的体験としてあったという体験をしうるというところ，ここが大きい意味をもっている」と述べている。このような*私*が物を失った時の体験は，複数の夢で生じており注目すべきと思われる。夢⑨もその一例である。

夢⑨ 「私は瀬戸物の湯呑みを持って，急な下り坂の道路の前にいる。…何度か湯呑みを転がしては坂を下るということを繰り返すが，今度の坂は長そう。坂を下り，湯呑みを探すが見つからない。私は引き返し，湯呑みを探すことにする。坂を戻っていると，坂はアスファルトの道路ではなく，舗装されていない山道のよう。いつの間にかスキー場の雪のないところっぽくなっている。まっすぐ下ってきたと思っていたが，下っていた道は直線ではなくカーブしている。私はその地形の複雑さに驚く。戻っていくと，左側にカーブした道は二股に分かれている。私は左端に沿って戻っていく。湯呑みが落ちていないかと，地面に顔を近づけて探す。遡って探しても湯呑みは見つからない。私はあきらめて先に進むことにする。念のためと思い，地面を見ながら坂を下りはじめる。下りはじめてすぐに，いつの間にか地面に苔のように緑が張り付いていることに気づく。その状態の地面が少し先まで続いていそう。硬い地面に少し雪が積もっていて，その雪が凍って氷状になって，緑が透けている。私はそんな大地に斜めに生えている大根を一本発見する。たくましい大根だと思う。」 (Giegerich, 2013, pp.98-99)

Giegerich (2013, p.102, p.106) は，湯呑みと植物をどちらも Cl の内にある女性性の象徴と捉え，「湯呑みのことをひたすら考え続けることによって，心理学的な意味において彼女自身の内に統合される」「湯呑みを失ったことを通して，新たなもの，苔と大根が現れる」と，夢の中で物を失ったことに意味があると指摘する。夢⑨のように，夢で私が物を失うことは，失った物に表される側面の再統合だけでなく，新たな潜在する心の側面を発見する契機にもなり得ると考えられる。これは，先述の夢の中の他者が*私*から別れていくことの意味とも通じると思われる。夢⑨の湯呑みは，先に転がり，探されるよう姿を消すことで，*私*を導く役割も担っていたと考えられ，夢の中の他者だけでなく，物との関わりも夢自我の成長に繋がることが示唆される。

(3) 夢の中の物同士の関わりの意味―物同士の関係に反映される心的力動

夢の中の物は*私*と関わるだけでなく，物同士でも関わりが生じることは注目すべきである。

物同士の関わりをよく表わした夢の例として，夢⑩をあげる。

夢⑩　「ぎざぎざの，リアス式海岸のような浜辺。満潮で，今にも水が道路の溢れ出しそうな状態。不思議なんだけど，海の水っていうか，すごく泡立っていて，ビールみたいな感じ。私は車を向こうのほうに停めて，浜辺を歩いていて，そしたらぶわっと波，というか，泡が溢れ出して，私のいる道のほうに入ってくる。濁った，雨上がりの川のような泥水。そのとき，「早く車のところに戻らなくちゃ」と思う。車が水に沈みそうになっている。」 (Giegerich, 2013, pp.26-27)

夢⑩について，Giegerich (2013, p.31) は，空気と水と泥が泡立ち，濁るなど反発し合いながらも，混ざり合い泥水となったことを，対立する物同士の「混合」に夢見手の心的「力動」が反映されていると指摘する。一面的に偏った意識状態とそれを補償する無意識の側面の関係は，*私*と相対する他者のような，“対立”として夢に表される場合が多いが，この対立は物同士の関係にも生じることは注目すべきである。対立物の間で接触が起こり，意識のあり方が無意識の側面から影響を受けることは補償的に働くと思われる。また，Giegerich (2013, p.31) は，夢⑩の泥水の中の車が壊れてもう動かないことから，「新しい意識」の状態に変容していく可能性にも言及している。対立物の間の緊張関係が崩れ，不均衡や混合が生じることは，意識と無意識の交流が始まり，意識のあり方の変容が示唆されるものであり，重要な動きと考えられる。

4. 夢の中の場所の役割

(1) 夢の中の場所に夢の私が置かれることの意味

夢を報告する際，最初に場所について述べられることは多く，それは夢自我にとって，その場が印象的だったためと考えられる。川嵜 (2000, p.94) は，夢で選ばれた場のイメージは，夢見手が「日常生きている関係のあり方とは異なる関係」を提示しようとするものであるため，なぜその場が選ばれたのか，その場所についての連想をあげていくことが，夢見手の意識に必要とされる側面を理解するために役立つと指摘する。例えば，「スペインのようだ…」から夢が始まる場合，「血のようになまなましく，戦い踊る暑さと情熱，こういった関係性の中に身を置くことが意識にとっては必要であるらしい。あるいは，それを必要とするような（歪んだ）意識のあり方をしているといってもいいだろう」と考察している (川嵜, 2000, p.90, p.94) 。夢見手の偏った意識のあり方にとって，夢の中の場に身を置くことそのものが補償的に働くと考えられ，実際に場に足を踏み入れる，引き返して場を辿りなおす，などの*私*と場の関わりには，他者，物との関わりと同様に意味があると思われる。

また，Giegerich (2013, p.99) は，*私*がある場所の「「前にいる」というのは，“課題がある”“何かのはじまりにいる”ということ」と指摘している。*私*と場との関わりが深まる中で，その場所は*私*に更に詳しく把握されることもあり，これは無意識的な側面との交流の深まりの現れであり，夢見手の気づきにも繋がると考えられる。例えば夢⑨で*私*が大根を見つけたように，場との関わりの中で*私*が何かを発見をすることには，発見に伴う意識のあり方の変容と，新たな心理的テーマへの移行が進むという点で意味がある。

(2) 夢の中の場所の状況の意味

① 夢の中の場所の状況―場に生じる対立物の意味

夢の中の場所には，夢見手の意識のあり方に必要な特徴を持つイメージが選ばれる場合に加

え, 夢見手の心の状態が場のイメージとして反映される場合も多い。例えば「凍り付いた海」(前川, 2002) や，「見かけの美しさの代償として，流動性を奪われて水たまりとなり，水のダイナミクスの具現化である魚も死滅しかけている小川」 (Umemura, 2015) など，Cl の心的エネルギーが失われ，無意識との交流が枯渇している状態が，場のイメージで表現されることもある。

また，夢⑩の陸地と海のイメージのように，場所の中でせめぎ合うものには，夢見手の心的世界の力動が反映されており，緊張関係を孕んだ場の均衡が崩れ，場の状況に変化が生じるだけでも意味がある。川嵜 (2000, p.97) は，「夢の中における反対のものや対立しているものの動きに注意しておくことで，意識にとってなにが課題となっているのかのヒントが得られる」と述べている。物同士の関係においても対立物の重要性が示唆されると述べたが，物同士の対立よりも大がかりな，場の状況に表される対立に焦点を当てることで，Cl の心理的テーマが夢見手にも Th にもより体験的に理解されやすくなるのではないかと考えられる。

② 空間の成立―垂直軸の広がり・水平軸の分節

夢の中の場所に，立体構造や垂直軸が生じることは，夢見手の内的世界の確立と通じるものとして重要視される。以下の夢⑪は，その一つの例である。

夢⑪ 「海。私はいかだの上にいる。海の周囲には山々があり，水は非常に澄んでいてきれい。これなら自分が落ちて沈んでも見えるなとヘンなことを考えている。ふと上を見上げると太陽がさんさんと照っていて，ぽかぽか暖かい。いい気持ちになってごろりと横になる。」 (「いつも (反復夢) は海が果てしなく続き，さびしく寒い感じなのに，今回は山々があり，景色が違った。上など見たことなかったが，見ると暖かい太陽があった。不思議。」) (川嵜, 2007, p. 2)

川嵜 (2007, p.52, p.53) は，夢⑪の反復夢からの変化について，「フラットだった彼女の世界のなかに上下軸が成立する」「「落ちる」ことによって，垂直的な方向性がその世界のなかに開かれる」と，上下軸の成立に注目する。東畑 (2014) は，夢は「無意識から「意味」を汲みだす行為」であり，「垂直的にシャープな運動を行いうる」と述べるが，夢⑪のような夢の中の場所における垂直軸の広がりにも，無意識との交流の深まりがうかがえる。Giegerich (2013, p.99) は，夢⑨の坂と，その坂を下ることを「下方への動き」として注目するが，水底や上空に*私*の注意が向けられたり (川嵜, 2007, p.2；橋本, 2013) ，夢で何かが落下する動き (石川, 2014；Umemura, 2015) は，垂直軸に開かれ，上下軸にて空間が広がる契機となり得ると思われる。

こうした上下軸での空間の広がりに加えて，区切られた内的なスペースができることも，夢見手の内的世界の確立に重要な役割を果たすと考えられる。川嵜 (2007, p.51) は，夢⑪の変化について，「「海の周囲に山々があり」とあるように，「海」を「海」とする分節がここでは生じる」と述べ，海が山々によって分節化され，輪郭を持って区切られた空間になったことの意義を考察している。「下にある見えない部屋」(橋本, 2011) ，「地下の底の鍾乳洞」(橋本, 2013) など，垂直軸の広がりと内的空間の成立は共に生じることも多く，成立した内的空間は*私*が新たな他者と出会う場になるなど，Cl の心理的テーマが展開する重要な場所ともなるため，重要な変化と思われる。

③ 夢の中の場所を移動することの意味―境界を超える動き・夢の私の脱出

川嵜 (2007, p.273) は，夢の場所が「境界」としての役割を持ち，*私*や対象がその境界を越えて場を移動することにより，そのイメージの「内容」そのものに変化が生じる場合を指摘して

いる。境界は，石川 (2014) の事例の「幅広い線路のような境界領域」や，「バスに乗る」のように，次の場への移動を示唆するイメージで現れることもある。場の移動に関しては，境界を越えるという形で心理的テーマの移行が示唆される夢が多い一方，夢で展開される心理的テーマとの直面に*私*が耐えられず，その場を逃れるために場の移動が生じる場合もある。例えば夢③では，女の子の父親の焼死後に「テレビのスイッチを替えた感じ」と場が変わるが，河合 (1982, p.26) は「耐えられなくなった場合は，自我はもっと意識のレベルに近い状態に夢のなかで変わることが多い…がんばって全体をテレビの話にしてチャンネルを変えるわけです」と考察している。夢での場の移動は，無意識との関わりが深まる場合と，意識に留まろうと生じる場合と，二つの意味を想定し，検討する必要があると思われる。

(3) 夢の舞台として繰り返し現れる場所

夢系列や反復夢には繰り返し現れる場所があり，例えば，「ロフト」 (橋本, 2011) など，Cl によりその場は様々である。しかし，石川 (2014) の事例のように，こうした繰り返し現れる場が，たとえ心理療法が開始する以前から見ていた反復夢にさえ現れていた場であっても，心理療法の過程で Cl の心理的課題が移ると出現しなくなる場合は多い。そのため，夢の舞台として繰り返し選ばれる場所は，Cl の心理的なテーマが特に表現されたものと考えられる。

また，繰り返される場の様子の変化も重要と思われる。川嵜 (2007, p.2) や Umemura (2015) の事例のように，夢の景色に現れるイメージが増え，豊かになることは Cl の内的世界の広がりとも考えられ，場の状態の変化に，Cl の心的回復が示唆される場合もある。加えて，Umemura (2015) の事例のように，場の状態の変化により，躊躇していた*私*がその場に足を踏み入れるようになるなど，繰り返し現れる場の変化は，*私*と場との関係の変化にも繋がると思われる。

繰り返し現れる場が Cl 個人に特徴的なイメージである場合とは別に，多くの事例で共通して登場する場所もあると思われる。前川 (2002) や Umemura (2015) の事例のように，特に“水”や“海”は，Cl の無意識と繋がるイメージとして注目される。また，橋本 (2013) ，石川 (2014) ，高嶋 (2014) の事例で共通して夢の舞台となった“家”は，守られた空間，Cl の自己像や身体性の表現として現れやすいため，家の内部構造の確立の程度から，Cl が自身の情緒を抱えるための内的な器の程度や，自我の強さについて，示唆を得る手がかりとなると考えられる。こうした現れやすい場のイメージは，Cl の夢を聞く際にも一つの視点となり得ると思われる。

5. 総合考察

(1) 夢の中の他者，物，場所の変容とその契機

夢の中の対象は，他者，物，場所のいずれも夢見手の心理的テーマを表しており，*私*と対象の関係のあり方と共に，夢系列に繰り返し現れるイメージの共通性に着目し，そのイメージの変容過程を辿ることは，心理療法への示唆に富むものと思われる。特に，*私*と対象の関係や，イメージ自体が変容する契機は重要であり，*私*だけでなく，対象のとった振舞い，変容に関わった対象は何かなどを検討することで，夢見手の意識のあり方に必要な側面がうかがえる。

変容の契機としては，*私*と対象が関わる中での“別れる”“失う”体験の重要性が示唆された。失ったと思っていたものがあったという実感を得ること，失った状態に留まること，どちらも失った対象の表す側面の統合に繋がり，後に新たな対象との遭遇から心理的テーマが移行する

流れが見られた。河合 (1982, p.34) は「硬直化したものを改変するためには，どうしても思いきった破壊が必要」と述べるが，日本人の夢では際立った破壊だけでなく，他者との別離，物の喪失も, 新しい心の側面との結びつきや, 創造性の契機となり得るのではないかと思われる。

また，夢の中で上下軸に開けること，境界領域を超えることは，夢見手の無意識との関わりを深め, 心理的テーマの展開だけでなく内的な器の確立にも繋がり, 重要な動きと考えられる。

(2) 夢の中の対象がイメージとして現れる意味

夢の中の対象は，イメージとして現れることで，夢見手の心理的テーマや問題をより明確に突き付ける役割も持つと思われる。例えば，夢自我の代わりに傷ついた対象のイメージを見ることで，無理をきたした意識のあり方，無意識の育まれていない側面への気づきを，*私*は実感を伴って得ることになる。また，具体的な対象として心理的テーマが現れることで，*私*が無意識の側面と直に関わりを持ちながらそのテーマに取り組むことができ，*私*の体験を伴った気づきが生じることも意義があると思われる。

更に，心理的テーマがイメージとして現れることには，Th にも Cl の心の状態が共有しやすいという意味もある。前川 (2002) は「どこか明るい感じのする人で，これらの夢を聞かなければ Th は Cl の深い抑うつ状態を受けとめられなかったかもしれない」と述べているが，夢見手が意識化していないことは，実際に Cl の話を聞いているだけでは伝わりにくいことも多い。心理療法場面でも夢のイメージを共有することで，Cl にはまだ意識化されず話題に上りにくいが，Cl の問題に関わる本質的なテーマについて，示唆を得られると思われる。

(3) 夢の中の対象同士の関わりの意味

夢見手の意識から遠い心理的テーマは，夢自我である*私*が直面できない場合も多く，対象が夢自我の役割も担うため，夢の中の他者・物同士の関わりや場の様子にも着目する必要が示唆される。特に夢の中の物・場所に起こる対立や衝突には，深い無意識の側面同士の関わりが現れており，これらの動きが生じることは，心理的テーマが展開する契機となると思われる。

また，現代の若者の意識のあり方には変化が生じており，アイデンティティの拡散が当たり前になりつつあることが指摘される。こうした断片的な自我では，その主体の脆弱さ，曖昧さから，*私*が無意識と相対する立場を引き受けられない可能性が高く，断片的な心の側面が各々反映された対象同士の関わりに注目する視点はより重要になると考えられる。対象同士の関わりを見ることからも，*私*は実感を伴った気づきを得るため，心理的テーマは展開すると思われる。また，Cl の自我に近い対象が代わりに変容を経験したり，無意識の潜在的な可能性を含む対象が強く成長することは，Cl の拡散した心的世界の統合や，自我の成長に繋がるため，現代の若者の意識のあり方においては, 夢の中の対象の果たす役割は更に増していくと考えられる。

6. 引用文献

Giegerich (2013). 河合俊雄・田中康裕 (編) ギーゲリッヒ夢セミナー, 創元社, pp. 26-34, 50-62, 82-107, 134-147, 169-176, 232-246.

橋本尚子 (2011). ある摂食障害の事例に見られる現代の意識と心理療法の課題. 箱庭療法学研究, **24** (1), 5-18.

橋本尚子 (2013). 自己の刻印としての傷. 箱庭療法学研究, **26** (2), 17-27.

Hillman, J. (1979). *The dream and the underworld*. New York: Harper & Row. 實川幹朗 (訳) (1998). 夢はよみの国から. 青土社. p. 155.

石川敬子 (2014). 超越性と女性像について. 箱庭療法学研究, **27** (2), 15-25.

Jung, C. G. (1934). *Die praktische Verwendbarkeit der Traumanalyse*. Zurich: Rascher. Hull, R. F. C. (訳) (1974). The Practical Use of Dream-Analysis. Princeton, N. J.: Princeton University Press.

Jung, C. G. (1948). *Allgemeine Gesichtspunkte zur Psychologie des Traumes*. Zurich: Rascher. Hull, R. F. C. (訳) (1974). General Aspects of Dream Psychology. Princeton, N. J.: Princeton University Press.

Jung, C. G. (1948). *Vom Wesen der Traume*. Zurich: Rascher. Hull, R. F. C. (訳) (1974). On the Nature of Dreams. Princeton, N. J.: Princeton University Press.

Jung, C. G. (1952). *Symbole der Wandlung*. Zürich: Rascher. 野村美紀子 (訳) (1992). 変容の象徴 上・下. 筑摩書房. pp. 20 (上), 208, 326 (下).

Jung, C. G. (1968). *Analytical Psychology: its Theory and Practice. The Tavistock Lectures*. New York: Vintage Books. 小川捷之 (訳) (1976). 分析心理学. みすず書房. pp. 25-26.

Jung, C. G. (1987). *Kinderträume*. Olten : Walter-Verlag. 氏原寛・李敏子・青木真理・皆藤章・吉川真理 (訳) (1992). 子どもの夢Ⅰ. 人文書院. p. 20.

河合隼雄 (1971). コンプレックス. 岩波書店. p. 170.

河合隼雄 (1976). 夢の中の「私」. 理想, **516**, 65-80.

河合隼雄 (1982). 夢と昔話の深層心理. 小学館. pp. 8, 13-14, 24, 26, 29-30, 34.

河合隼雄 (1986). 夢分析による学校恐怖症高校生の治療例. 河合俊雄（編）心理療法論考. 創元社, pp. 42, 50-51, 54.

Kawai, H. (1995). *Dreams, Myths & Fairy Tales in Japan*. Einsiedeln: Daimon Verlag. (河合俊雄（訳）(2013). 日本人の心を解く 夢・神話・物語の深層へ. 岩波書店. p. 110.)

川嵜克哲 (2000). 夢の読み方　夢の文法. 講談社. pp.90, 94, 96-97.

川嵜克哲 (2007). セラピストは夢をどうとらえるか―五人の夢分析家による同一事例の解釈. 誠信書房. pp. 2, 7-8, 51-53, 81, 271, 273.

Konakawa, H. (2016). Attempt at Comparison of Japanese and Western Dreams Using Structural Dream Analysis. 箱庭療法学研究, **29** (1), 83-115.

桑原晴子 (2016). 青年期境界例女性との面接過程. 箱庭療法学研究, **28** (3), 29-39.

前川美行 (1997). 夢に現れる“醜なるもの”のもつ意味. 心理臨床学研究, **15** (1), 24-35.

前川美行 (2002). 夢イメージにとどまることの難しさ. 心理臨床学研究, **20** (2), 145-156.

瀬川美穂子 (2016). 「育てられる者」から「育てる者」への変容のプロセス. 箱庭療法学研究, **29** (1), 3-15.

高嶋雄介 (2014). “意識していること”と“実際の在り方”にズレを抱えた思春期男児との面接. 箱庭療法学研究, **27** (1), 17-28.

東畑開人 (2014). 「かたちづくること」と美的治癒. 箱庭療法学研究, **27** (1), 3-15.

Umemura, K. (2015). Knowing the Unknown and Leaving Neurosis. 箱庭療法学研究, **28** (1), 69-78.

（臨床教育学専攻講座　博士後期課程 3 回生）

（受稿 2017 年 8 月 31 日，改稿 2017 年 11 月 20 日，受理 2017 年 12 月 20 日）

心理療法過程で生じる夢の中の他者，物，場所の役割

粉川尚枝

分析心理学では，夢の補償機能を重視し，主観水準の解釈に基づいて，夢の中の対象に現れたクライエントの無意識の側面に気づき，それを以前の意識的態度に統合することが目指される。本論文では，夢の中の他者，物，場所の役割について考えることを目的とし，夢の中の対象への着目と検討が，クライエントの心理的テーマへの示唆を得ることや，後の心理療法の展開に繋がったとされる，17 の夢分析の事例を精査した。結果，夢の中の他者の役割にはバリエーションが見られることや，夢の私と夢の中の物，場所との関わりも，他者との関わりと同様に意味があることが示された。また，夢の私が関わらない対象同士の関係にも，夢見手の心理的テーマや心の状態が現れるため，夢の私の代わりに，夢の中の対象が変容，成長を体験することの意義が示唆された。加えて，夢の中の対象同士の対立や，夢の私が対象を失う体験も，夢見手の心理的テーマの展開にとって重要と思われる。

Role for Other People, Things, and Places in Dreams Appearing in the Course of Psychotherapy

KONAKAWA Hisae

Analytical psychology attaches importance to the compensatory function of dreams. Therefore, psychotherapy aims to pay attention to the clients' unconscious appearing as objects in dreams and to unite it to their conscious attitude based on interpretation on the subjective level. To discuss the roles of other people, things, and places in dreams, this study reviewed 17 dream analysis case studies, where focusing on these objects in dreams contributed to gain insight into clients' psychological themes and to develop psychotherapy process. This study showed that there are some variations in the roles of other people in dreams, and that the dream I's relations with things or with places are as important as the dream I's relations with other people. In addition, the relations between objects in dreams, where the dream I does not join, was suggested to express the dreamer's psychological theme and psychological situation. Therefore, it seemed important that the objects in the dreams have changed or grown up in place of the dream I. Again, the conflict between objects in dreams and the dream I's experiences losing someone or something seem to also develop the dreamer's psychological theme.

キーワード：心理療法，夢，文献研究

Keywords: Psychotherapy, Dream, Literature review